

「とんでもない商品」

増山雄三

いま、イギリスでは、EU離脱の是非を巡ってメイ首相が苦戦を強いられ、その趨勢は予断を許さない状況になっているが、かつては世界中に多くの植民地を持ち、大きな影響力を持っていた「大英帝国」の行方は、果してこれからどうなるのだろうか。

ところで、このイギリスは十八世紀末には対清国貿易に熱心で、乾隆帝八十才の祝賀使節を北京に派遣し、通商改善交渉をしようとしたが、帝は英王ジョージ三世に「わが天朝は豊かだから、外国と通商する必要がない。ただ茶葉等を求めてくれれば、慈善の心で恩恵を施す」と言ったので、清国には平等互惠という通商の精神など全くなかった。

中国の茶葉は、十六世紀のはじめ、船員や伝道師によってヨーロッパに紹介され、次第

に喫茶の習慣が広まっていき、特にイギリスではティータイムが習慣化し、それが生活必需品となり、茶ばかりでなく茶器用の陶器などへの需要が急増していた。

それでも、茶の供給源は中国にしかなかった。たので、金額は張るが大量の茶葉を中国から輸入せざるをえず、毛織物などを代償に輸出したものの、中国人の趣味に合わず、結局、片貿易になってしまい、イギリスは巨額の購入代金を中国に支払う事態が続いていた。

それでも、ここからがイギリス人の狡知の見せどころになるが、インドでケシから作った「阿片（アヘン）」という「とんでもない商品」を開発し、それを輸出する事で、購入する茶葉より阿片の方が遥かに多くなり、中国側が購入する代金の銀が海外に流失し、人民生活に黒い影を投げかけるようになった。

阿片は、もともと痛みを麻痺させる薬として治療の場で使われていたが、一方、衰世と相まって現世から逃避するため、その齎す

快樂や陶酔に溺れて常習すると、人間は忽ち
廢人になつてしまふものだが、それが、明末
から異常に速くそして広く行き亘つた。
イギリスのやり方は巧妙で、本国で生産し
た綿花や毛織物やインドの香辛料などは、鎖
国中の清が唯一開港していた広州に持込み自
由に交易していたが、阿片だけは広州に持ち
込まず、新しく獲得した「香港島」を、阿片
取引の根拠地に変えたのだ。

阿片は、イギリスの東インド会社の専売品
で、彼らは非合法輸入品の阿片商人も兼ねて
いて、万一、それが見つかれば正規の貿易も
ストップされるので、考えついたのが、阿片
をストックする躉（トン）船という、帆柱に
「出売阿片（阿片を売ります）」と幟を垂ら
した背の高い洋上倉庫で、それを、香港島が
あるヴィクトリア湾の沖に浮かべておいた。
そして、それらはイギリス本国から派遣さ
れた東インド艦隊が守っていたものの、何隻
もの砲艦を派遣するには、多くの乗組員將兵

や弾薬それに石炭と食糧などに膨大な費用がかかったが、香港島にあるイギリスの港湾施設と建物も含めた全てが、この阿片交易で得た利益で賄われていたのである。

さらに、この躉船から阿片が小舟で岸に運ばれる途中、官船に捕まらないよう密売人を通じ、一万箱につき二百箱を賄賂として警備当局に渡し、こうして陸揚げされた阿片は、堂々と中国各地へばら撒かれていった。

それでも、阿片による亡国を案じた当時の道光帝は、「阿片吸飲者は死刑に処す！」といい、一八三九年三月、かねてから阿片の絶滅を主張していた湖広総督の「林則徐」を欽差大臣（特命大臣）に任命し、広東に派遣し阿片密輸の取り締まりを任せる事にした。

林則徐としても、広州は阿片の密輸を黙認する事で諸官が賄賂で私腹を肥やし、相手のイギリス艦船の兵装や武器は優秀で強く、広東の情勢が緊迫すれば、彼らは必ず出兵してくるだろうと予想していた。

そこで林則徐は、着任後すぐ二つの命を發し、一つは阿片商人向けで、「今後、阿片を国内に持ち込まない」という誓約書の提出を求め、「持ちこんだら死刑」と通告すると共に、もう一つはイギリス宛で、「汝らの国ですら吸引しない阿片を、数十年以上に亘り中華の民を蠱惑させている。躉船の阿片を隠匿せず、速やかに官に納めよ」というもので、これも誓約書を要求した。

こうして没収した総量千四百トの阿片を、彼は速やかに纏めて海水と消石灰で化学処理し、誓約書をださない阿片商人は港から退去させたため、これが二年間に及んだ「阿片戦争」が点火される伏線になったのである。

一方、事態の進展を憂慮したイギリスは、誓約書の提出を拒否し広東在住の全英国人をマカオに避難させたが、これに追討ちをかけるように、林はマカオを武力封鎖し食料も断ったうえ、家族や船員たち数千人のイギリス人を、マカオから洋上へ追放してしまった。

それでも、翌四十年二月にイギリス軍艦十六隻がマカオ沖に姿を見せ、清国船団に砲撃を加え殆ど壊滅したあと天津沖に入ると、道光帝は恐慌状態を示し、直ちに強硬派の林則徐を罷免し、弛禁論者の琦善を後任にしてイギリス側と交渉した結果、香港島割譲と賠償金六百万ドルという条約を結ぶ事にした。ところが、イギリス軍が撤退するや、清国の強硬派がもり返し、道光帝は調印直前に条約締結を拒否したため、イギリス軍は軍事行動を再開し、揚子江を遡航して南京玄関口の鎮江を陥落させると、帝は屈辱的な和議に同意せざるをえず、一八四二年八月に、英艦コンウォールス号で「南京条約」を結んだ。これによって、香港島割譲と二千万ドルの賠償金支払や最恵国待遇に治外法権など、数々の不平等条約が定められ、以降、事もあらうに、長江以南の阿片貿易を、清国政府は非公式ながら黙認させられてしまった。それでも、以降十数年に亘り広州住民たち

による英国人排斥運動と暴動が続き、英国籍のアロ―号を清国が不当に臨検したのを契機に、一八五六年から英仏連合軍との間に再び戦争が勃発、四年間の戦いのあと連合軍に北京が占領され、のちに、「北京条約」が締結され九竜半島も割譲させられ、これにより、清の半植民地化が決定的になった。

これら二つの戦争で、英軍の手先になった漢人達による非愛国的行為が数々あったが、当時の中国は満州民族政権で、漢民族にとっては満州人もイギリス人も同じ異族、彼らは「国を満人に授けるより西人に与えた方がまだましだ」というのが理屈だった。

林則徐が、満人の道光帝に呼ばれ北京から広州に赴任する時、「事勢には云い難き微妙なものあり」と呟いたというが、それは、この国の抱えていた問題を、「漢人」だった彼が一番よく知っていたからに違いない。

令和元年六月